

## 異文化接触と植民地主義 : Joseph ConradのLord Jimにおけるマレー世界

藤山, 和久  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/27305>

---

出版情報 : 比較社会文化研究. 34, pp. 57-66, 2013-09-09. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン :  
権利関係 :

# 異文化接触と植民地主義

## —Joseph Conradの*Lord Jim*におけるマレー世界—

フジ ヤマ カズ ヒサ  
藤 山 和 久

### 1. はじめに

Joseph Conradの前期作品*Lord Jim* (1900) は、主にマレー諸島<sup>1</sup>を舞台とした小説である。本小説の中心テーマは、語り手Marlowの視点から見たJimの人物像であると言え、その解釈をめぐるのは、難船し乗客を見捨てて逃げたことに対するJimの罪意識とその償いという主題で論じられることが多い。<sup>2</sup> そのため、自己の英雄的な理想像にとりつかれたイギリス人男性Jimの主人公像が、従来行われてきた研究の主眼であると言っても過言ではない。<sup>3</sup> しかしながら、一個人のロマンティストとしてのみJimを捉えることは、本小説における一面的な視座を提示するに過ぎない。本稿では、Jimにとって異国の社会集団であるマレー世界との関わりにおいて、Jimの理想主義やMarlowの語りについて再検討してみたい。

Robert Hampson が“From his first novel, . . . Malaysia had an important place in Conrad's fiction. . . Furthermore, in his own writing, Conrad repeatedly confronts the issue that was to become so important in twentieth-century anthropology: how to describe another culture” (1) と指摘するように、Conradの小説においてマレー世界は重要な場所であり、「異文化」をいかに表象するかという点は作者が繰り返し直面してきた大きな問題であると考えられる。さらに、Conradが生きた時代、すなわち19世紀後半から20世紀初頭の時代は、周知のように、西欧列強による植民地支配が絶頂にあり、本小説の舞台であるマレー世界を含め、アジア・アフリカ世界はヨーロッパ世界の支配下にあった。そうした時代における気風・精神が小説の中にも浸透していることは否めないだろう。そのような意味においても、Christopher GoGwiltが“Conrad's fiction itself has become an indispensable guide to the history of colonialism”(137)と述べるように、*Lord Jim*もまた、植民地主義に関する一つの指標を提示する作品として捉えることができる。

本稿は、このような点を念頭に置き、周縁的な存在と

して描かれるマレー社会の共同体に目を向けつつ、語り手MarlowやJimの属する白人西欧社会の共同体との関係について言及し、異文化間の接触に関する問題について考察することを主たる目的とする。さらに、植民地として表象されるマレー世界を分析することによって、植民地主義の社会や文化が、本小説においていかに捉えられているのか今一度検証を試みたいと思う。

### 2. Jimの理想主義とMarlowの“one of us”言説

*Lord Jim*の主人公Jimは、エセックスの牧師の家に生まれ、幼い頃から海の生活に憧れ、堂々とした体躯としっかりした頭脳を持っていたため、高級船員養成船で自らの仕事を見事に成し遂げる。Jimの人物像として最も特筆すべき点は、理想主義者あるいは夢想家としての側面である。Jimは、沈みかかっている船から人々を救う姿や、熱帯の海岸で未開人と遭遇し船員たちの反乱を鎮める姿に我を忘れて、現実世界を直視することができないでいる(5)。<sup>4</sup> 自己の理想像に胸をふくらませるJimは、ある意味では、同じくマレー諸島を舞台とする第一作*Almayer's Folly* (1895)における主人公Almayerの姿とも合致する。Almayerは彼にとって厭わしい現実世界から逃避し、富を得て娘と一緒にヨーロッパに移り住むという夢想世界の中に耽溺している。作者は初期のマレー諸島を舞台とした小説において一貫して、異国の東洋の地で孤立し、実現しそうな夢や理想を抱く人物を創り上げている。さらに語り手Marlowは、Jimと対峙した際の彼の夢想家の側面として想像力の豊かさを見て取ると同時に、彼の性質を“With every instant he was penetrating deeper into the impossible world of romantic achievements” (60)と看破する。換言すれば、すでにこの時点で語り手は、高い理想を抱くJimにおけるロマンティストとしての性質を助長することによって、彼の夢想と現実の行動との大きなズレを暗示する役割を担っていると言える。

夢想世界の中に生きるJimは、一等航海士としてPatna号に乗り組み、そこで現実の試練に立ち向かう

こととなる。800人の巡礼を乗せたPatna号は航行中に何かの浮遊物にぶつかり、Jimは沈没の恐怖に襲われ、乗客を見捨てて船長たちとともに救命ボートに跳び下りる。そうしたJimの現実の行動に対して、語り手は“Nothing could be more true: he had indeed jumped into an everlasting deep hole. He had tumbled from a height he could never scale again” (82) と彼自身の見解を提示する。Patna号におけるJimの逃避行為は、言うまでもなく彼の抱く英雄的な理想像とは対極にあり、理想と現実とが乖離していることを示している。その後、査問会によって船員免許取り消しとなったJimは、沖手代としてマレー諸島の様々な港で人気を博するほどの仕事をこなすのだが、一つの事実、つまりPatna号事件でのJimの逃避行為が露見すると、突然職を捨てて東の港へと移ってしまう。

しかしながら語り手Marlowは、現実の行動に挫折したJimに一種の同情を抱き、友人のSteinに相談し、Jimを出張所の代理人としてスマトラのPatusan (架空の地名) という土地に派遣する。Albert J. Guerardが“*Lord Jim* is a story of sympathies, projections, empathies . . . and loyalties. The central relationship is that of Marlow and Jim” (147) と指摘するように、おそらくMarlowは、英雄的な行為に憧れつつも実行することができなかった人間の弱さをJimの中に見出して強い共感を覚えたのだろう。あるいは、Harold Bloomが“Marlow, our narrator, becomes something like a father to Jim” (4) と述べるように、MarlowはJimの父親的な代理の役目を担う存在として捉えることもできる。いずれにせよ、何故Marlowは、そこまでしてJimに救いの手を差し伸べようとするのだろうか。その理由の一つとして、次の引用におけるMarlowの語りにあるように、Jimを“one of us”とみなしているからだと考えられる。

And all the time I had before me these blue, boyish eyes looking straight into mine, this young face, these capable shoulders, the open bronzed forehead with a white line under the roots of clustering fair hair, this appearance appealing at sight to all my sympathies: this frank aspect, the artless smile, the youthful seriousness. He [Jim] was of the right sort; he was one of us. He talked soberly, with a sort of composed unreserve, and with a quiet bearing that might have been the outcome of manly self-control, of impudence, of callousness, of a colossal unconsciousness, of a gigantic deception. Who can tell! (56)

Marlowは、少年のような青い目や若々しい顔、力強い肩、ブロンズ色の広い顔といったJimの容姿に共感を誘われ、彼を“one of us”とみなす。このようにJimを“one of us”と捉えるMarlowの表現は本小説において何度も反復されていることから、この言い回しは重要な意味を含んでいると言える。例えば、*Heart of Darkness* (1899) の語り手は“Between us there was . . . the bond of the sea. Besides holding our hearts together through long periods of separation, it had the effect of making us tolerant of each other's yarns—and even convictions” (103) と述懐しており、*Lord Jim*のMarlowもまたある側面において、同じ海に生きる人間としてJimを“one of us”と捉えて同一視していると考えられる。Ian Wattもほぼ同様の見解を示し、MarlowとJimとの関係について“*It is true that the friendship of Marlow and Jim grows out of what are perhaps the two strongest and most universal forms of solidarity which remain in modern society: that of the occupational group, and that of the hierarchy of generations within it*” (336) と言及している。<sup>5</sup>

だがここで考えなければならないのは、乗客を見捨てて逃げたJimの船員としての行動規範の問題である。作者は自伝的エッセー*A Personal Record* (1912) の序文の中で、この世界は「忠誠」という概念に基づいているといった趣旨を表明し、船員のみならず人間全てに共通する「忠誠」という倫理的側面の重要性を説いている(xix)。とすれば、JimがPatna号でとった現実の行動は「裏切り」あるいは「無責任」であり、「忠誠」という概念とは相反するものである。そのような彼を“one of us”として、「忠誠」という倫理的規範を前提とする共同体の中に組み込むMarlowの態度には大きな疑問が残る。

この点に関連してHomi K. Bhabhaは、Marlowが好んで使う“one of us”という言い方は、西欧列強の植民地主義的な意図を孕んでいることを示唆している。

The repetition of ‘He was one of us’ reveals the fragile margins of the concepts of Western civility and cultural community put under colonial stress; Jim is reclaimed at the moment when he is in danger of being cast out, or made outcast, manifestly ‘not one of us.’ Such a discursive ambivalence at the very heart of the issue of honour and duty in the colonial service represents the liminality, if not the end, of masculinist, heroic ideal (and ideology) of a healthy imperial Englishness—those pink

bits on the map that Conrad believed were genuinely salvaged by being the preserve of English colonization, which served the larger idea, and ideal, of Western civil society. (250)

国境を越えたはるか遠くの東洋の植民地において、西欧社会で自明視されていたはずの文化もしくは理念は、多かれ少なかれおそらく通用しないものであったと考えられる。そういう意味において、Marlowが繰り返して使う“one of us”が「植民地のストレスに晒された西洋の市民性と文化共同体の概念の脆い限界」を吐露するものであるとするBhabhaの指摘は、確かに的を射ていると言えるだろう。

そのような見解に立脚して、さらに別の見方をするならば、この“one of us”を「人種」という概念に敷衍して考えることもできる。端的に言えば、MarlowがJimに対して“one of us”と語るとき、どうやら人種主義者としてのMarlowの立場が浮かび上がってくるようである。以下のMarlowの語りは、その点を際立たせている。

Jim had been away in the interior for more than a week, and it was Dain Waris who had directed the first repulse. That brave and intelligent youth (“who knew how to fight after the manner of white men”) wished to settle the business off-hand, but his people were too much for him. He had not Jim’s racial prestige and the reputation of invincible, supernatural power. He was not the visible, tangible incarnation of unflinching truth and of unflinching victory. Beloved, trusted, and admired as he was, he was still one of them, while Jim was one of us. Moreover, the white man, a tower of strength in himself, was invulnerable, while Dain Waris could be killed. (263)

Dain Warisという人物は、Jimの最も親しいマレー人部族の戦友であるが、語り手はJimを“one of us”とする一方で、Dainを“one of them”と規定することによって、「我々」と「彼ら」の境界を設定している。その基準は、白人であるか否かという、いわば西欧中心の人種的な優越によるものである。つまりMarlowにとって、西欧白人としてのJimは「頼りになる人物で不死身」であり、他方非西欧人としてのDainは「殺される可能性がある」といったように、両者の際立った差異化がなされ、前者

が後者よりも優勢であるという優劣の序列化が明確な形で行われている。この点はまさに、Edward W. Saidが示唆するところの“a Western style for dominating, restructuring, and having authority over the Orient” (*Orientalism* 3) と合致し、“contemporary discourse, which assumes the primacy and even the complete centrality of the West” (*Culture and Imperialism* 22) をMarlowの語りにおいて見出すことができる。

さらに語り手はまた、「聴衆の中でただ一人Marlowの語る物語を最後まで聞くことになる人物」(“only one man of all these listeners who was ever to hear the last word of the story”) (245) を通して、こうした人種的な境界設定の言説を巧みに使っている。

You [the listener] had said you knew so well “that kind of thing,” its illusory satisfaction, its unavoidable deception. You said also—I call to mind—that “giving your life up to them” (them meaning all of mankind with skins brown, yellow, or black in colour) “was like selling your soul to a brute.” You contended that “that kind of thing” was only enduring and enduring when based on a firm conviction in the truth of ideas racially our own, in whose name are established the order, the morality of an ethical progress. (246)

引用中の“you”とは「聴衆の中でただ一人Marlowの語りを最後まで聞くことになる人物」を指しているが、これはただ単にその人物を指し示すだけでなく、ある意味において読者に対する呼びかけとしての一つの戦略が企図されているとも考えられる。つまり、語り手が“you…”と語りかけることによって、読者もまた「彼ら＝褐色や黄色、黒い色の皮膚をした人種」(さらには聴衆のみならず読者もまた、MarlowやJimの属する「我々」に同化する) という言説を共有することになるのだ。周知のように、*Lord Jim*は*Blackwood’s Magazine*に連載された小説であり、その読者層が帝国主義に賛成の立場の保守的なイギリス中産階級の男性たちであったことを考慮するとより一層興味深い(Knowles and Moore 43-45)。<sup>6</sup>

Carola M. Kaplanが“Marlow exposes the malignant underside of the ‘one of us—one of them’ distinction, which robs a people of their power and their belief in themselves” (144) と指摘するように、語り手Marlowは、上掲の引用に見られる人種的な境界設定の言説に

よって、ある側面において、Jimを西欧白人男性という枠組みの中に組み込むと同時に、「我々」ではないマレー人などのいわゆる非西欧人を「彼ら」として排斥する役割を担っている。西欧世界とマレー世界との接触によって、西欧近代が覇権を握る社会システムが構築・強化されると同時に、おそらく両者の境界が揺らぎ崩壊する可能性も孕んでいたはずであろう。Ania Loombaが“*One of the most striking contradictions about colonialism is that it both needs to ‘civilize’ its ‘others’, and to fix them into perpetual ‘otherness’*” (173) と論じるように、西欧世界は「他者」(非西欧世界)を「文明化」しつつも、結局のところ、その「他者性」は保持しなければならなかった。その好例が、本小説中に見られるような人種的な差異化なのである。そのような意味において、Marlowの語りは、Jimを“one of us”として同化することによって西欧的なアイデンティティを確立することに寄与しているのである。

### 3. 植民地としてのマレー世界

本小説の舞台となっている19世紀後半のマレー世界をはじめとする東南アジアの社会史を繙いてみると、一つの大きな変化として「複合社会の形成とそこにおける白人社会の成長」を挙げることができる。一般に、この時代の東南アジア社会は、言語や文化、宗教、思想、習慣などにおいてそれぞれ異なる様々なコミュニティが並存しつつも交わらず、どこでも人種原理によってヒエラルキー的に編成され、白人が頂点、原住民が底辺を占めて、その間に中国人、アラブ人、インド人などが位置したとされている(白石 108)。このようにして19世紀後半の東南アジアでは、オランダやイギリスなどを中心とした植民地世界が形成され、「西欧文明の光によってアジアの暗闇を照らす」という文明化のプロジェクトを通して、植民地的近代化が始まった。だがそうしたプロジェクトは、Marlowの“*light (and even electric light) had been carried into them [the Archipelago] for the sake of better morality and—and—well—the greater profit too*” (158) といった語りが示唆するように、「文明化の使命」や「進歩」の名目のもとに行われた支配・搾取であったという点もまた、従来から指摘されてきたことである。

*Lord Jim*においても、注意深く読んでみると、植民地主義に関する直接的な言説がいくつか見受けられる。例えば、“*He [Stein] traded in so many, and in some districts—as in Patusan, for instance—his firm was the only one to have an agency by special permit from*

*the Dutch authorities*” (165) や “*Stein . . . had obtained from the Dutch Government a special authorization to export five hundred kegs of it [gunpowder] to Patusan*” (263) のような一節がそうである。これらの引用において、権力の中心である「オランダ政府」(the Dutch authorities / the Dutch Government) の記述がはっきりとなされている点は注目に値する。一見すれば何気ない一節かもしれないが、「商業活動」そしてさらには「政治的支配」へと拡大しつつある19世紀後半における西欧列強の存在を垣間見ることができる重要な場面でもある。史実に基づくならば、この時代のマレー世界(特にインドネシア)は概して、商業用農作物確保の現実的必要から、あるいは土着社会の近代化を目指す理想主義的欲求から、村落共同体のレベルにまで西欧国家(オランダやイギリスなど)の支配の手が及ぶようになったと指摘されている(永積 247)。

こうした当時の時代趨勢を反映して、本小説におけるマレー世界は宗主国オランダに従属的な立場の植民地として表象されている。いわゆる土着文化が色濃く残る村落共同体のPatusanは、本小説の後半部分の重要な場所であり、植民地主義的な近代化の影響を必然的に受けることとなる。また、PatusanはBugis族の共同体でオランダの保護下にあつて、17世紀にヨーロッパの貿易商人たちが胡椒を求めてこの地に出かけたという描写が小説中にある(164)。しかし、胡椒貿易で栄えたこの地も、胡椒の産出が途絶えてからは深い森林によって外部の世界から隔絶されており、“*a native state, perfectly defenseless, far from the beaten tracks of the sea and from the ends of submarine cables*” (259) と設定されている。つまりこのことは、利潤追求のための支配が、いわゆる近代文明社会から取り残された村落共同体を打ち壊してしまったことを意味するのである。<sup>7</sup>

Patusanの情勢は、Marlowの語りに見られるように、予断を許さない混乱期にあつて、秩序のない社会空間として描かれ、そのような状況下に置かれた世界の中に、Jimは出張所代理人として足を踏み入れる。

The two parties in Patusan were not sure which one this partisan most desired to plunder. The Rajah intrigued with him feebly. Some of the Bugis settlers, weary with endless insecurity, were half inclined to call him in. The younger spirits amongst them, chaffing, advised to “get Sherif Ali with his wild men and drive the Rajah Allang out of the country.” Doramin restrained them with

difficulty. He was growing old, and, though his influence had not diminished, the situation was getting beyond him. This was the state of affairs when Jim, bolting from the Rajah's stockade, appeared before the chief of the Bugis, produced the ring, and was received, in a manner of speaking, into the heart of the community. (187)

ここで重要な点は、Patusanにおける深刻な危機的状況を打開する救世主として、JimがDoraminの一派を中心としたマレー人部族の共同体に迎え入れられることである。それによって、Patusanにおける社会情勢は、前述したように、まさに白人であるJimを頂点とし、現地人が底辺を占めるという人種原理によるヒエラルキー構造が形成される。ところがその一方において、Rajah Allangの一派に見られるように、“Were the Dutch coming to take the country? Would the white man like to go back down the river? What was the object of coming to such a miserable country?” (183) などとJimのPatusanへの出現を糾弾する者たちもおり、異質者あるいは外部者としてJimを排除しようとする動きも同時に見られる。これは取りも直さず、Jimに対する、ひいては植民地主義システムに対する被支配者・被抑圧者としての抵抗や異議申し立てを意味すると言えらる。祖国を捨てて、文明的な秩序のない辺境のいわゆる未開世界において自らの理想をどうにか具現化しようとするJimであるが、マレー社会の共同体の視点から見ると、西欧白人男性という人種的な相違あるいは支配・被支配という関係性における障壁を払拭することができない一面が、本小説から浮かび上がってくる。

このような異文化間の接触をめぐる対立に関して、次の引用に顕著に見られるように、人種的な偏見に支配されたMarlowの語りも注目すべきであろう。語り手は、Patusanの現地人の「灰や泥のしみで汚れたぼろのサロンを巻いただけで、半分裸」の恰好と、Jimの「白い衣服を着た頑丈な姿とふさふさと輝く金髪」との際立った対照性について言及する。

A few youths in gay silks glared from the distance; the majority, slaves and humble dependants, were half naked, in ragged sarongs, dirty with ashes and mud-stains. I had never seen Jim look so grave, so self-possessed, in an impenetrable, impressive way. In the midst of these dark-faced men, his

stalwart figure in white apparel, the gleaming clusters of his fair hair, seemed to catch all the sunshine that trickled through the cracks in the closed shutters of that dim hall, with its walls of mats and a roof of thatch. He appeared like a creature not only of another kind but of another essence. (166)

Jimとマレー人との身なりの違いは、語り手にとっては、人種の違いのみならず人間の本質の違いまでも指し示しており、そうであるからJimは「とても威厳があって、冷静沈着」に見えるというのだ。このようなMarlowの人種主義的な態度に対して、Chinua Achebeのように“Joseph Conrad was a thoroughgoing racist” (257) と酷評する批評家がいることも事実である。その一方において、Saidが論じるように、Conradは生粋のイギリス人ではなく、“a Polish expatriate” (*Culture and Imperialism* 23) であるから、西欧白人と非西欧人との人種的差異を助長することによって、後者を支配あるいは抑圧すべきだという立場にあると一概には言えず、海外領土拡張といった西欧列強の理念を必ずしも肯定してはいないとConradを擁護する見方もある。

どちらの見解が正しいのか、つまりConradが“racist”であったのかどうか、ここで見極めることは難しい。だが、小説中のMarlowの語りは、明らかに人種主義的な傾向を示しており、さらにMarlowやSteinなどのような西欧白人男性が優位に立つのに対して、マレー人が周縁的なもしくは従属的な立場に置かれるという西欧中心主義的な構図が提示される。この点に関して、Michael Valdez Mosesもまた同様の見解を与えている。

For all of Conrad's sincerer interest in and deep sympathy for traditional and non-Western societies, he tends to present the inevitable victory of modernity from a Western perspective. Although Conrad portrays many of the Asian characters of Patusan in a favorable, even heroic light, they remain in the background, secondary figures in Jim's drama. In *Lord Jim* the story of a modern European hero dominates the political tragedy of a non-Western society. (104)

小説のタイトルが示す通り、自己の英雄的な理想像にとりつかれたイギリス人男性としてのJimが物語の主眼にある一方において、西欧近代の共同体が非西欧社会の政

治的な悲劇を生み出した点に注意を向けることは重要である。なぜならば、Jimの物語において、周縁的・従属的存在であるマレー人たちを前景化することは、彼らの西欧社会に対する抵抗の声を紡ぎ出すだけでなく、相互の連帯性や協調性に対するパースペクティブを可能にするからだ。

そのような視座に立って考えると、PatusanにおけるJimとマレー人、とりわけDoraminの息子Dain Warisとの関係性については、必ずしも植民地主義的な支配・被支配という枠組みだけで捉えられるようなものではない。JimはDainと協力して略奪者Sherif Aliを撃退し、Patusanの「実質的な統治者」となり、マレー人たちから「ジム閣下」と呼ばれるようになる。一つの村落の統治者となり閣下となったJimは、確かに力関係の上では優位に立つ存在であるが、JimとDainとの関係は、どちらかと言えばむしろ対等なものとして描かれている。Marlowは、そのような二人の関係を次のように語る。

Dain Waris, the distinguished youth, was the first to believe in him [Jim]; theirs was one of those strange, profound, rare friendships between brown and white, in which the very difference of race seems to draw two human beings closer by some mystic element of sympathy. Of Dain Waris, his own people said with pride that he knew how to fight like a white man. This was true; he had that sort of courage—the courage in the open, I may say—but he had also a European mind. . . . Of small stature, but admirably well proportioned, Dain Waris had a proud carriage, a polished, easy bearing, a temperament like a clear flame. His dusky face, with big black eyes, was in action expressive, and in repose thoughtful. He was of a silent disposition; a firm glance, an ironic smile, a courteous deliberation of manner seemed to hint at great reserves of intelligence and power. Such beings open to the Western eye, so often concerned with mere surfaces, the hidden possibilities of races and lands over which hangs the mystery of unrecorded ages. He not only trusted Jim, he understood him, I firmly believe. (190)

「二人の関係は褐色人種と白色人種の間で、まさにその人種の違いこそが何か神秘的な共感の要素によって

二人の人間をより親密にするように思われる」というMarlowの語りからは、やはりここでも人種主義的な態度が露呈しているが、それと同時に、JimとDainにおける人種を超えた友情によって、異文化に生きる者同士の協調性や信頼関係が強調されている点は特筆に値する。結末部において、Gentleman Brownの陰謀によって、Dainは戦死しJimは射殺され、二人の友情関係は終焉を迎えるけれども、作者はマレー社会の共同体に生きる人物たちを、一種の偏見的な西欧人の眼を通してではあるが、個性や人格を備えた人間として、時に彼らに対する共感を込めて描き出そうしている。

以上の議論を踏まえると、Marlowが語るJimの物語には、次のような二つの側面があると考えられる。その一つが、現実の行動に挫折したJimに共感し、“one of us”と語るときである。このときの語り手は、人種主義的な観念をもった西欧植民地主義の代弁者的な役割を担っている。そしてもう一つが、ロマンティストとしてのJimの姿を、マレー人たちの共感や反発とともに語るときである。異文化の土地でマレー人たち（とりわけDain）と交わっていくJimについて語るMarlowから、植民地主義的な支配・被支配の枠組みを超えた共生の概念（の可能性）が見えてくる。要するにMarlowの語りは、このような両義的なイデオロギーが交錯し合っているのである。SaidはMarlowの語りの技法について、自伝的な解釈において分析を行っている。

Conrad could probably never have used Marlow to present anything other than an imperialist world-view, given what was available for either Conrad or Marlow to see of the non-European at the time. Independence was for whites and Europeans; the lesser or subject peoples were to be ruled; science, learning, history emanated from the West. . . . But because Conrad also had an extraordinarily persistent residual sense of his own exilic marginality, he quite carefully . . . qualified Marlow's narrative with the provisionality that came from standing at the very juncture of this world with another, unspecified but different. (*Culture and Imperialism* 24)

この引用は、*Heart of Darkness*のMarlowについて言及した部分であるが、*Lord Jim*のMarlowについても当てはまるだろう。確かに、海外領土の拡張に向かって西欧

諸国が競って力を高めようとしているさなかであって、「劣等のあるいは従属民族は支配される運命にある」ことをConrad自身も認めざるを得なかったと推察することができる。<sup>8</sup> しかしながら、「祖国を喪失した周辺者感覚が根深く残る」作者の境遇が投影され、Marlowにおける語りの「暫定性」によって彼なりの帝国主義的な世界観が構築されている、というのがSaidの主張である。<sup>9</sup> この語りの「暫定性」とは具体的には、前述の通り、Marlowの人種主義的あるいは植民地主義的な態度と、そうした枠組みを超越しようとする態度の二面性を指し示していると言ってもよいだろう。<sup>10</sup> このような両義的で曖昧な語りこそ、当時のマレー世界における植民地主義の社会や文化に対する作者自身の声と重なり合うのである。

#### 4. おわりに

高い理想を抱きながらも現実の行動において挫折したJimは、本国イギリス(宗主国)から遠く離れた文明から隔絶したマレー世界(植民地)において、自らの理想を具現化するための機会を得て、一つの村落の統治者となり、“Lord Jim”と呼ばれるようになる。そのようなJimに対するマレー社会の共同体の反応は、一つには、支配者としてのJimあるいは植民地主義への抵抗や反感として表れ、もう一つには、人種や文化の相違もしくは支配・被支配の枠組みを超えて協調や共感という形として表れる。しかしながら、マレー世界に属する者たちのそのような交錯した声や反応は、Marlowによって語られるのであって、彼ら彼女らが自ら語る場は与えられていない。その上、マレー人たちの語りだけでなく、Jimの語りの場もまた与えられることはなく、あくまでもMarlowの語りが主体となっている。本小説の主人公Jimは、語り手Marlowあるいは豪商Steinに依存することで現実世界に生きる術を見出しており、皮肉にも彼は主体性を欠いた存在として映し出される。

本小説におけるマレー世界は、Jimの理想主義を実現するために与えられた恰好の舞台であるばかりでなく、語り手Marlowにとって、異文化との接触においてJimを“one of us”と規定することを通して西欧的なアイデンティティを確保するための重要な場所でもある。それと同時に、植民地として表象されるマレー世界において、Marlowの属する西欧社会の共同体とマレー社会の共同体との支配関係が生み出されている。しかしその一方において、Jimとマレー人たちとの交わりの中には、支配・被支配の関係を越えた共生の視座の可能性も込められて

いるのである。

#### 註

<sup>1</sup> Conradが*Lord Jim*を出版する前に、博物学者Alfred Russel Wallace (1823-1913) はマレー諸島を訪れてフィールドワークを行い、1869年に著書*The Malay Archipelago*を刊行した。Wallaceの著書は、Conradが*Lord Jim*を執筆する際の参考になっていたとされる(Sherry 141)。

<sup>2</sup> 本小説の主題に関して、F. R. Leavisは“*In Lord Jim Marlow is the means of presenting Jim with the appropriate externality, seen always through the question, the doubt, that is the central theme of the book*” (209) と述べ、Jocelyn Bainesは“Conrad raises the significance of Jim’s action to a metaphysical level and in portrayal of Jim’s spiritual Odyssey explores the theme of guilt and atonement” (242) と言及している。

<sup>3</sup> 例えば、Frederick R. Karlは“The spine of the book is formed by the three decisions of increasing intensity that Jim must make; each decision shows Jim as a romantic hero who is a failure” (121) と論じている。

<sup>4</sup> そのようなJimの姿に対して、Andrea Whiteは“*At first, Jim seems familiar to readers of adventure fiction, a protagonist clad in white— ‘one of us’—whose desires have been shaped by fiction that served to construct the imperial dream*” (193) と指摘する。

<sup>5</sup> この“one of us”について、Linda Drydenは“*One of us’ implies breeding and a sense of belonging to a particular social group: that of the English gentleman and the genteel classes*” (140) と見解を示している。

<sup>6</sup> *Lord Jim*が*Blackwood’s Magazine*に掲載された経緯については、Stape (113-20) 参照。

<sup>7</sup> Conradの第一作*Almayer’s Folly*および第二作*An Outcast of the Islands* (1896) における主要な舞台であるSambir(架空の地名)というマレー世界における共同体もまた、文明社会から隔絶した辺境の地であり、Conradは多くの小説において、そうした周縁的な世界を好んで舞台として設定している。

<sup>8</sup> この点に関してSaidは、Conradの悲劇的な限界を“*As a creature of his time, Conrad could not grant the natives their freedom, despite his severe critique of the imperialism that enslaved them [natives]*” (*Culture and Imperialism* 30) と分析している。

<sup>9</sup> Kaplanもまた、“*Lord Jim uses the conventions of*

the colonialist adventure tale to question imperialist ideology and cultural hegemony. Calling upon his own experience of marginality and oppression, Conrad employs the discourse of domination only to reveal its self-deceptions, its blindnesses, and its tyranny”(145)と作者自身の周縁性との関連において論じている。

<sup>10</sup> 木下善貞氏はMarlowの語りについて、その語りなしではJimは存在せず、Jimの実像に辿り着こうとする「タマネギの皮むきの語り」が本小説に深い奥行きを与えていると指摘する(175)。

#### 【引用・参考文献】

- Achebe, Chinua. “An Image of Africa: Racism in Conrad’s *Heart of Darkness*.” *Joseph Conrad: Heart of Darkness*. Ed. Robert Kimbrough. New York: W. W. Norton & Company, 1988, 251-262.
- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. 1960. London: Weidenfeld & Nicolson, 1993.
- Bhabha, Homi, K. *The Location of Culture*. 1994. London: Routledge, 2004.
- Bloom, Harold, ed. *Joseph Conrad’s Lord Jim*. New York: Chelsea House, 1987.
- Conrad, Joseph. *Lord Jim*. 1900. Oxford: Oxford UP, 2002.
- . *Heart of Darkness and Other Tales*. Oxford: Oxford UP, 2008.
- . *A Personal Record: Some Reminiscences*. 1912. London: J. M. Dent & Sons, 1960.
- Dryden, Linda. *Joseph Conrad and the Imperial Romance*. London: Macmillan, 2000.
- GoGwilt, Christopher. “Joseph Conrad as Guide to Colonial History.” *A Historical Guide to Joseph Conrad*. Ed. John G. Peters. Oxford: Oxford UP, 2010. 137-161.
- Guerard, Albert J. *Conrad the Novelist*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1958.
- Hampson, Robert. *Cross-Cultural Encounters in Joseph Conrad’s Malay Fiction*. Basingstoke: Palgrave, 2000.
- Hewitt, Douglas. *Conrad: A Reassessment*. London: Bowes & Bowes, 1975.
- Kaplan, Carola M. “Conrad the Pole: Definitely Not ‘One of Us.’” *Conrad and Poland*. Ed. Alex S. Kurczaba, Alex S. Lublin. Maria Curie-Skłodowska UP, 1996. 135-151.
- Karl, Frederick R. *A Reader’s Guide to Joseph Conrad*. Syracuse: Syracuse UP, 1997.
- Knowles, Owen and Moore, Gene M. *Oxford Reader’s Companion to Conrad*. 2000. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1948. Harmondsworth: Penguin Books, 1966.
- Loomba, Ania. *Colonialism / Postcolonialism*. London: Routledge, 1998.
- Moser, Thomas. *Joseph Conrad: Achievement and Decline*. Hamden, Connecticut: Archon Books, 1966.
- Moses, Michael Valdez. *The Novel and the Globalization of Culture*. Oxford: Oxford UP, 1995.
- Said, Edward W. *Orientalism*. 1978. Harmondsworth: Penguin Books, 1995.
- . *Culture and Imperialism*. 1993. New York: Vintage Books, 1994.
- Sherry, Norman. *Conrad’s Eastern World*. Cambridge: Cambridge UP, 1966.
- Stape, J. H. *The Several Lives of Joseph Conrad*. London: Arrow Books, 2007.
- Wallace, Alfred Russel. *The Malay Archipelago*. 1987. North Clarendon: Periplus, 2000.
- Watt, Ian. *Conrad in the Nineteenth Century*. Berkeley: U of California P, 1981.
- White, Andrea. “Conrad and Imperialism.” *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Ed. J. H. Stape. Cambridge: Cambridge UP, 1998. 179-202.
- 木下善貞『英国小説の「語り」の構造』開文社出版、1997。
- 白石隆『海の帝国—アジアをどう考えるか』中公新書、2000。
- 永積昭『オランダ東インド会社』講談社学術文庫、2000。
- 中野好夫編『20世紀英米文学案内3 コンラッド』研究社、1996。
- 本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波新書、2005。
- 吉田徹夫『ジョウゼフ・コンラッドの世界—翼の折れた鳥』開文社出版、2005。

## Cross-Cultural Encounters and Colonialist Ideology: The Malay World in Joseph Conrad's *Lord Jim*

Kazuhisa Fujiyama

Joseph Conrad's *Lord Jim* (1900) is mainly set in the Malay Archipelago. This paper examines the role and significance of the Malay world, which is a place of another culture for Marlow and Jim, through an analysis of Jim's idealism, Marlow's narrative and other peripheral characters in Malay society.

In the first chapter, I discuss the meaning of Jim's dreams of heroism and Marlow's discourse of "one of us." Whereas Jim is frustrated with his own behavior, Marlow adopts a paternal attitude and is willing to save him, repeatedly referring to Jim as "one of us." The concept of "one of us" serves to establish a Western identity in opposition to the Malay people, such as when the narrator refers to Dain Waris as "one of them," that is to say "others."

In the second chapter, I discuss the representation of the Malay world, concentrating on the relationship between Jim and the Malay people, especially Dain Waris. Generally, Patusan society reflects the colonialist ethos of late nineteenth-century Europe. Malay characters "remain in the background, secondary figures"; however, Dain is portrayed as Jim's trusted friend, a relationship that transgresses racial boundaries.

The colonial sphere of the Malay world in this novel is not only a suitable location for Jim to try to realize his own dreams of heroism, but also a significant place for Marlow to establish a Western identity by considering Jim to be "one of us" and identifying the Malay community as the "other." On the other hand, Marlow's narrative of describing the friendship between Jim and Dain implies the possibility of cross-cultural cooperation which transcends the colonial power relationship. I argue that this double perspective creates ambivalent narrative which more or less overlaps with the author's attitude toward contemporary colonial society of the Malay world.